

穆儒丐の歴史小説『福昭創業記』の意味

村 田 裕 子

序

第一章 『福昭創業記』をめぐる評価と問題

『福昭創業記』の評価

穆儒丐の執筆動機

第二章 『福昭創業記』の英雄たち

『福昭創業記』概要

英雄と「夏夷の見」

英雄の創生

第三章 『福昭創業記』と満洲国

結 語

序

『福昭創業記』は「満洲国」の代表的新聞『盛京時報』のジャーナリストであり作家、評論家でもあった穆儒丐⁽¹⁾壮年期の代表的長編小説である。『福昭創業記』の「福」とは福陵、すなわち瀋陽東郊ヌルハチの陵〔通称東陵〕からとり、「昭」とは昭陵、すなわち瀋陽北部にあるホンタイジの陵〔通称北陵〕からとったものである。その題から推測されるとおり本書はホンタイジとヌルハチの建国創業のさまを描いた歴史小説である。『福昭創業記』はまず、『盛京時報』文芸欄『神皋雜俎』⁽²⁾に掲載された。連載期間は一九三七年七月二二日より翌三八年八月一二日まで、全三六九回にわたる。その後、東方国民文庫⁽³⁾の一冊として単行本出版された。さらに約半世紀ののち、晚清民国小説研究叢書の一冊として、一九八六年七月、上下二巻本として吉林文史出版社より出版された。

『福昭創業記』はその背景に「満洲国」建国という歴史的大事件があることから、清朝成立とこれをオーバーラップさせて「満洲国」建国を謳

い上げるものとして批判的にみられがちであった⁽⁴⁾。しかし、拙文「一満洲文人の軌跡」⁽⁵⁾で穆儒丐はその青少年時代に義和団事件、日本留学、辛亥革命を通じて強烈な満州人としての民族意識をもつに至ったことを明らかにした。十五年あまりの歳月を経過して、彼の民族意識が不変であったはずはないが、しかし消失してしまったことも信じ難い。「満洲国」建国という歴史的大事件を通過したこの時期に、穆儒丐を古えの建国創業記を書くように駆り立てたのは、けっして時局迎合的な考えからだけではあるまい。むしろ彼に内在していた民族の魂がこの事件によって揺り動かされた結果ではないだろうか。本論文では『福昭創業記』の内容を検討しながら穆儒丐の主體的執筆動機を探り、それによって本書のもつ意味を解明していきたい。

第一章 『福昭創業記』をめぐる評価と問題

『福昭創業記』の評価

『福昭創業記』は発表当時、かなり注目を集め、評判を呼んだことは、本書が一九三九年に二つの大きな文学賞を授賞していることから推察できる。すなわち、文芸盛京賞と民政部大臣文芸賞である。文芸盛京賞は盛京時報社が創刊三十周年を記念して一九三六年に設けたもので、科学、文芸、体育の三分野でその一年間にもっとも注目される業績をおさめ、かつ今後有望視される人材に授与した。『盛京時報』は「満洲国」以前から瀋陽で創刊され、東北地方では最長の歴史と権威を誇る新聞であったから、本賞はこの地においては相当に影響力あるものだった。民政部大臣文芸賞は一九

三十九年設立され、『福昭創業記』が第一回の授賞作品であった。民政部とは文化行政を司る行政機関である。その目的は「広く文芸の興隆をはかり、民心を安定させ、国民一般の情操を涵養すること」⁽⁶⁾であり、「満洲国」の文化を躍進させ、作家を奨励するためにこの民政部大臣文芸賞を設けたのである。

当時「満洲国」の文壇は九一八事変の余波からようやく回復期にあった。『福昭創業記』はどのような点で評価を得たのであろうか。民政部大臣文芸賞の講評は次のようである。

『福昭創業記』の主題は清朝発祥時代に太祖[ヌルハチ]太宗[ホンタイジ]が満州を営んだ史実で、『満洲実録』⁽⁷⁾などを資料として、小説の体裁で書き上げた。その文は簡明で要を得ており、その事実は正史及び近代史料にもとづき、いわゆる演義小説とは異なる。全文三万余字、豪華洋洋たる巨編というべきである⁽⁸⁾。

文芸盛京賞の選定理由もほぼ上記同様である。つまり、史実にもとづいて満州の歴史を描いている点、簡潔な文体で格調高く、いわゆる通俗演義ものの類とは一線を画しているという点で評価を受けた。この評価は現代でも共通している。『福昭創業記』吉林文史版の前言に玉漫は次のように述べている。

『福昭創業記』のとるべき点は比較的歴史を尊重しているところである。登場人物の言論、思想、行ない、習慣、性格及び歴史的事件の発生や結末はすべて事実にもとづいている。たとえば、『清太祖武皇帝実録』『満文老档』『満文老档秘録』『東華録』等々⁽⁹⁾はヌルハチやホンタイジの事跡を記した権威ある文献史料である。われわれは前記の文献を『福昭創業記』と対照してみると、たちまちその基本プロット、基本事実、そのディティールさえも文献に見当たらない記述がないことを知るであろう⁽¹⁰⁾。

歴史小説は元来歴史に題材を取った物語というだけで、民衆に正しい歴史知識を与える役割を担ってはいなかった。史実に忠実かどうかというよりは、刺激的で興味をそそる記述であれば、人々

は満足したのである。客観的文献主義的な執筆態度をとるか否かということは日本に於いては大正14年森鷗外「歴史その儘と歴史離れ」⁽¹¹⁾によって初めて意識の俎上にのぼった。リアリズムという近代的文学思想が主観と創造の天地であった歴史小説のジャンルにも及んだ結果であった。中国に於いて公認された歴史である「正史」は強大な権威で、その内容は絶対性をもっていた。中国の歴史小説は正史のカリスマ性の前にかえって自由奔放でありえた。近代に至っても史実と創造の二立背反に苦しむことは少なかった。それよりはむしろ自由に歴史を利用して己れの思想を展開させるものが多かった。たとえば、魯迅や郭沫若等が書いたような歴史比喩小説、歴史劇などである。穆儒丐が通俗演義ものと同様の白話体を用いながら、客観主義の立場にたって歴史小説を書いたことはたしかに特筆に値することである。

穆儒丐の執筆動機

外からの評価ばかりでなく、穆儒丐自身もとりわけ客観的文献主義的態度で『福昭創業記』を執筆したことを強調している。彼はなぜこのような執筆態度にこだわったのであろうか。『盛京時報』連載の最終回に彼は次のように書いている。

作者はただ何冊かの編年史や札記をつぎはぎして前後につながりをつけて章回体小説としたにすぎない。表面上は演義ものであるが、その骨子はやはり正史であるから、けっして小説とはいえない。……[中略]……それならば、わたしたちはなぜ昔の話を再び持出して、いたずらに筆墨をついやしてこのような大仰な歴史の絡車いとぐるまを語るのだろうか……[中略]……歴史の素養がない一般の人達はこの本を一読する必要があるだろう。彼らもまさに[この本を]望んでいたかもしれない。いわんや「満洲国」に生活する人はそうであるだろう。満州の歴史や先住民の遺産や栄光を知らないでいてよいはずがあろうか。私たちはそれらを記憶の彼方に放っておいて一顧だにしないでいてもよいだろうか⁽¹²⁾。

『福昭創業記』の連載予告⁽¹³⁾と民生部大臣賞授賞時の作者の談話も同様に、本書の史実に対する忠実さを強調する。たとえば、広告には「本書附

会を加えず、事に抛りて直に書く。坊間の荒誕不經の書と同日に語るべからず」とある。また談話では次のようにのべている。

私が本書を書いたはじめの意図は決して文芸作品を書こうということではなかったのです。ただ紹介者の立場にたって、わかりやすく誠実に太祖太宗の事跡を世人に紹介し、『清史稿』『清朝実録』『東華錄』『開国方略』⁽¹⁴⁾をよむ暇がない、或いは能力がない人にこの本を利用して太祖太宗がどのように満族を統一し、このような大帝国を建設したかを理解させようとしただけです⁽¹⁵⁾。

難しい正史の類に触れる能力も暇もない人々のために正しい「満洲国」の歴史を説くことが穆儒丐の『福昭創業記』執筆目的であった。つまり、彼は啓蒙的目的のために本書を書いたのである。それゆえ、歴史に題材をとりはするけれども面白さのみを追求する通俗演義もののように勝手な創作を加えることを慎み、ひたすら歴史に忠実な執筆態度をとったのである。

しかし、穆儒丐『福昭創業記』がその創作の成果として客観的真実としての清朝前史を描きだしているかということについては検討する必要がある。この問題は「史料というものはある行為がわれわれの目前で行われる、あるいはわれわれ自身が行為者である場合ほど、たしかなものではない」⁽¹⁶⁾といわれるように、穆儒丐がよって立つところの歴史文献の客観性に対する疑わしさから、また、穆儒丐自身の主観の混入に対する疑いから生じる。しかし本論文は清朝前史の歴史文献を検討することは主眼としていない。穆儒丐が「史実」という隠れ蓑の下に、如何なる彼自身の主体的執筆動機や目的を潜ませていたかが問題なのである。

先に引用した『福昭創業記』最終回は続けて次のように書いている。

満洲人はこれまで至るところで人の白眼視を受けてきた。そして今に至っても「白帽の誇り」を免れていない。もともと我が先住民は文芸方面でもたくさんの逸材を輩出しておるが、互いにまた彼これと賞揚する悪癖がないので、ただ人の罵りを受けるいっぽうで罵ることができない。罵るに

も道理があるなら、当然耐えるべきで誰も罵り返せとはいわない。だが、もし不当に罵られ、天の道理を顧みることさえせずに縦に罵られるのなら、口では言い返さずとも心中忿懣遣る方ない。本書には〔無謀な〕罵りは断じてない。是是非非はひとえに天の道理と人情によった。事実に至っては、正史により附会せず、誠実に述べたのみである。

以上、穆儒丐は「事実に至っては、正史によって附会せず、誠実に」記述しただけであると「史実」尊重の態度を強調しているが、この数行前に「満洲人はこれまでいたるところで人の白眼視を受けてきた」と民族的遺恨を吐露している点に注目しなければならない。彼の執筆の根本には、国民的啓蒙という以前に、民族的遺恨に由来する動機としてのナショナリズムがあったのではないか。そうであるならば、『福昭創業記』は史的事実に忠実とはいっても彼のこのような思想が反映されるはずである。次に『福昭創業記』の内容を具体的に検討してみよう。

第二章 『福昭創業記』の英雄たち

『福昭創業記』概要

『福昭創業記』は白話体を用いた章回小説であり、全三十四回からなる。物語は大きくふたつに分けられる。前半はヌルハチ率いる女真国家の創成期である。後半はホンタイジを中心とする四頭政治による女真の発展期である。創成期はわずか十三騎の軍団を率いてヌルハチが女真族の統一をはかって諸族と争い、その過程で女真の巨大化を喜ばない明朝と対立せざるを得なくなり、ついにサルフの戦いで明軍を破り、女真統一の悲願を達成すると同時に遼東に確固たる地位を築くまでである。後半部では遼東大舞台の一大勢力となった女真の国・後金国が、近隣諸国とどのように関係を築き、またどのように征服していくかというホンタイジらの政治家、外交家としての手腕が描かれる。ここでは明やその属国朝鮮の後金国に対する「夷狄思想」も描かれる。ここでその梗概をみてみよう。

物語は満洲族発祥の神話伝説から始る。長白山

のふもとのブルフリ湖で水浴していた三人姉妹の仙女のひとりフォクルンが神鵲の落とした赤い実を食べて懐妊し、昇天できなくなった。彼女は男子を産むが、その子は天命によってこの地上に送られてきた子であって、名をアイシンギョロ・ブクリョンション〔愛新覚羅・布庫里擁順〕といった。彼がヌルハチの祖先である⁽¹⁷⁾。

ヌルハチは一五五九年建州女真タクシの子として生まれた。十歳で母を亡くし、さらに継母との仲も悪く、十九の時分家させられた。財産はわずかだったが、ヌルハチはこの不運を恨むことがなかった。ヌルハチ二五歳の時、ニカンワイランという者が明と結んでグレ城を攻めたさい、彼の父と祖父がニカンワイランの陰謀で明軍に誤殺されるという事件が起きた。明は誤殺を認め謝罪したが、ヌルハチはこの時わずか十三騎の軍を率いて旗揚げし、仇敵ニカンワイランに立ち向かった。彼はまず仇敵の首を討ち取り、その後、分裂した女真を統一すべく周辺諸国に戦いを挑んだ。ヌルハチ軍は次々と勝利をおさめ、ウラ、ハダ、ホイファ、エホの主要女真部族のうち、エホを除く三国はたちまちヌルハチの下に統一された。

ヌルハチは国土拡大につれ、内政も重視し、さまざまな改革を行なった。まず満州文字を定めた。従来、モンゴル文字を借用して間に合わせていたが、女真に共通の文字を与えることで「文治」面で民族の独立をはかったのである。経済面では、主要貿易品であった人參の長期保存を可能にする「煮晒法」を考案し、収益を増加させた。軍事面でも、軍訓を發布し、さらに八旗制度をしいて、軍隊を整理統合した。安定し、繁栄したヌルハチの国はさながら「実現されたユートピア」であった。ヌルハチは一六一六年、国号を「後金」と定め、「英明汗」の称号を戴いた。

後金国の繁栄は明にとっては脅威となり、国境周辺でさまざまなこぜりあいがあった。また、後金国統治下に未だ帰属していなかったエホは明に支援を頼み、ヌルハチと対峙した。このような状況下、一六一八年、ヌルハチは「七大恨」を天に告げ、明討伐の決意を表明した。明はもともと「勅書」⁽¹⁸⁾を出して女真族をその統治下に置くばかりか、さらに女真相互の対立をはかって統一を阻む「夷を以て夷を制する」の策を取っていた。ヌルハチはこのような高圧的な明の政策に対してこ

の時まで恨みを抱きつつも従ってきたが、領土紛争を機に出陣を決意したのである。

ヌルハチ軍はまず清河城をうちとり、次に天下分け目のサルフの戦い〔一六一八年〕で勝利し、エホは滅亡した。明は遼東経略〔官名〕に熊廷弼を起用するなどしてヌルハチの勢力拡大を制するための策を講じるが、明朝内部の分裂、腐敗は甚だしく、ヌルハチ勢を押さえることは難しかった。遼陽、広寧といった重要拠点落とし、ヌルハチは一六二五年、瀋陽城に遷都した。ここは地理的条件がよく、政治経済の中心地にふさわしかった。瀋陽はのちに盛京と称されるが、これは満州語の“^{ムンデ}盛んな”“^{ホタン}城”からきている。

二五歳で旗揚げしてのち、ヌルハチは戦においては連戦連勝、国内情勢も安定し、順調そのものであった。しかし、一六二六年、袁崇煥守る寧遠城の戦いは彼にとってはじめての大きなつまずきとなった。袁は外来の火器ポルトガル砲を用いて、女真の「雲梯」⁽¹⁹⁾に対抗したのである。近代兵器の前に女真軍は敗退し、ヌルハチは負傷した。彼は広寧敗退後、健康すぐれずに、ついに同年八月、六七歳で病没した。〔以上は第一三回まで〕

ヌルハチ没後、その汗位は第八皇子であるホンタイジにひきつがれた。ホンタイジは一五九二年生まれで当時三四歳であった。彼は兄や従兄弟たち（ダイジャン、アミン、マングルタイ⁽²⁰⁾）と実質上四頭政治を行なった。ヌルハチの死の直後で混乱もあり、また明側も望んでいるので、彼はまず明との和睦に取り組んだ。しかし、この交渉は明の高圧的な要求もあってとりわけ難航した。ホンタイジは交渉を進める一方、東方の脅威である朝鮮を攻めて国境線を確定しようとした。李氏朝鮮は秀吉の朝鮮出兵の際明から多大の援助を受けた恩があったため、「天に二日なく、人に二王なし」として、容易に服さなかった。

明と幾度か使者を交換しながら、またラマ僧李喇嘛の仲立ちを得たにもかかわらず、和睦はついに成功しなかった。その原因は、関外における女真族の勢力の伸長にもかかわらず、明が「天朝」と自称し、女真を「夷狄」として見下していたことにある。ホンタイジは和議が決裂すると錦州攻めに出陣するが、決定的打撃は与えられなかった。このころモンゴル諸部は次々に後金国に帰順してくる。ホンタイジは一時錦州攻めを中止して「文

館」⁽²¹⁾を設置した。ヌルハチ時代は戦に明け暮れ、学問に力を注ぐ暇がなかったが、ホンタイジ時代は余裕が生まれ、ホンタイジは文化事業を重視し、モンゴルや朝鮮の文献、漢籍などから有用な書物を選び翻訳した。「文武併用」し、「文教を以て太平を^{なす}佐け」⁽²²⁾ようとしたのである。

モンゴルをほぼ勢力下においたホンタイジは一時熱河経由で河北に侵入し、北京城を包囲するが、明を打倒するには至らなかった。寧遠城防衛の責任者であった袁崇煥は明朝から責任を問われ、磔刑に処される。後金国内でもペイレ⁽²³⁾のアミンが任されていた四城で酷政を行なった結果、人心は遊離し、かえって明と結び、その支援をした。結局、四城は失われ、アミンも罪を得て、四頭政治は一人を欠くことになった。

絶え間ない戦いの中、明軍からの投降者も多くあった。ホンタイジは彼らを差別することなく重く用いて漢軍八旗を編成させ、ヌルハチの死の遠因でもあり、寧遠攻略を阻んだ最大の原因でもあるポルトガル砲の鑄造と使用を担当させた。ポルトガル砲の模造は「紅夷大砲」と称され、後金軍は兵器装備の面でも明軍と互角になった。また、投降した明将の孔有徳らはホンタイジのブレインとなり、対明、朝鮮、チャハル問題について重要な意見を奏上した。

チャハルは当時元朝の末裔であるリンダン汗が統治していた。彼は元朝敗退の際中国本土より持出した「伝国の璽」⁽²⁴⁾を受け継いでいた。ヌルハチの庶子ドルゴン⁽²⁵⁾はリンダン汗死後チャハルに遠征し、「伝国の璽」を入手した。そこでホンタイジは一九三六年四月一日、寛温仁聖皇帝となりの、国号を「大清」とし、年号を崇徳とした。こうして大清帝国は誕生した。ホンタイジは明征伐より先に後方の憂であった朝鮮に軍を送り、ついに三田渡⁽²⁶⁾に「大清皇帝功德碑」をたてさせ、清国の存在を認めさせる。

ホンタイジは夢で明にかわって帝位につくとのお告げを得、鉅鹿の戦いにのぞむ。しかし、ヨトペイレ⁽²⁶⁾が戦死したので、一時撤兵して、明との和睦を交渉する。明はこれを拒絶し、怒ったホンタイジは再び出兵して錦州城を落とし、松山城を包囲する。松山城は容易に陥落せず、兵糧攻めを半年にわたって行なう。その間に明の寧遠総兵洪承疇が投降し、大いに力となる。だが、不幸にも

松山城攻めの最中にホンタイジの愛妃敏惠恭和元妃が急死する。ホンタイジは臨終に間に合わず、落胆し、この心の痛手のもとで病気になる、一六四三年八月、山海関制覇の夢を果たすことなく死んでしまう。[三二回まで]

最終回[三三回]はホンタイジ亡き後、山海関突破までを描く。ホンタイジ死後、即位したフリン[のちの順治帝]はまだ五歳という幼さで、ドルゴンが摂政となり、内政を助ける。ときに明国内は李自成の乱によって混乱をきわめていた。最後の明帝崇禎帝縊死のあと、寧遠総兵呉三桂は清に投降し、彼の手引きによって清軍はついに入関を果たしたのであった。

『福昭創業記』には歴史的文献に記載のない移儒丐の創作によるできごとと人物もない。この意味に於いて本書は「史実」に忠実な歴史小説であるといえる。しかし、歴史的イベントや人物の解釈ということになると全く作者の主観がないとはいえない。それは物語からもっとも強く印象づけられるふたつの点に象徴的にあらわれている。すなわち、「英雄」としてのヌルハチ、ホンタイジ像と、実質がともなわないにもかかわらず「天朝」と自称する明との対照的なありさまである。これらの強調点はいずれもすでに述べたように創作的工夫、すなわち虚構によっているのではなく、作者がある意図のもと、ある史実を選択した結果あらわれているのである。つぎにこれらの強調点を具体的にみてみよう。

英雄と「夏夷の見」

まず、英雄としてのヌルハチからみてみよう。ヌルハチはその祖先が発祥伝説に象徴されるように神格化された尋常ならざる外貌で読者の前にたちあらわれる。

太祖の天顔は鳳凰のような切れ長な目をもち、りっぱな体格で耳はふくよか、その立てるさまは天子の風采があり、声は朗朗と響き、威厳があり、举止は常ならず、その勇ましさは世に知れわたり、騎射に優れ、国民は心から敬愛した。名付けて、「聡毅貝勒」⁽²⁷⁾という。

『福昭創業記』冒頭の記述が伝えるものは勇猛

と叡知を兼ね備え、かつ国民の敬愛の対象であった生まれながらに天子の風格をもつ「英雄」としてのヌルハチである。ヌルハチの非凡さはまず武人でありながら、好戦的で残忍なところがなく、節度をもっていたという点にみられる。彼は正義なしには戦いをしなかった。怒りや私利私欲にまかせた情動的な争いは慎んだ。たとえば、明がヌルハチの勢力拡大を恐れ、六堡という明とヌルハチ側の境界の地から農民を追い立ててヌルハチ側に経済的打撃を与えた事件があった。この時、ヌルハチの家臣たちは怒って兵を挙げようとした。しかし、ヌルハチは彼らを諫めて次のようにいった。

人に貴賤大小はないのだから、すべて公正に考えねばならない。いたずらに智慧に頼って、意にまかせて侵略したり、縦に掠奪することは、長続きはすまいぞ。いわゆる公正というのはおのれの心を他人にもおよぼして同じようにみてやることである。それゆえ、何事もない国に、喜んで兵を出すべきではない。そこが徳を修めず、縦に侵略してきたら、これは暴挙である。その暴挙を征伐するなら天は我を助けようぞ⁽²⁸⁾。

ヌルハチはたんなる野心のために戦いに挑み、領土を拡大していったのではない。相手の暴挙が極まらない時、もしくは、天からの要請などの「大義」なしには挙兵しなかった。明という超大国に宣戦布告した事情も、明の度重なる非道にたいして忍従し続けた結果であり、領土的野心ではなかった。宣戦布告の書である「七大恨」にもそのような「有徳」の武人ヌルハチの面目躍如たるものがある。

我が祖父、父はかつて明の境いの一本の草、一塊の土も損うことがなかったのに、明はゆえなく辺境の地に兵を起し、我が祖父、父を殺した。これが第一の恨み。このようなことあれども我はなお明との修好をのぞみ、碑を建て、「明、満州各々の境界を越えるものがあれば、それを知ったものが殺せ。知っても殺さなければそのものを罰するぞ。」と誓ったのに、このような誓言に背き、明兵は境を出で、エホに味方して見守っている。これが第二の恨み。また、明人が毎年境を密かに

出て、満州の地を掠奪するので、この誓言によってこれを殺したのは当然であった。しかしこの誓言を顧みず、なぜ殺したかと、広寧に叩頭にいった我がガングリ、ファンギナ[ともに家臣の名]を捕らえて鉄鎖に繋ぎ我を脅し、かつ我が兵十人を境に連れてこさせ殺させた。これが第三の恨み。明兵は境を出てエホを見守り、我が結納を与えたエホの女を蒙古に与えた。これが第四の恨み。幾世代もの間、満州の境界地であった柴河、三岔児の三地方の女真が種を蒔き草を刈り耕した穀物をとりいれさせずに追い払った。これが第五の恨み。天が非とした境界外のエホの言葉を聞き入れ、悪口を書いて人を遣わし、我々を様々に痛めつけ辱めた。これが第六の恨み。ハダはエホに味方し、二度挙兵して攻め来ったが、その報復として我が討つと、天はハダを我に与えた。のち明がハダに味方して我を脅し、ハダの人をその旧地に送り返させたが、エホ軍が数度彼らを襲い連れ去った。およそ天下の諸国が戦えば、天が非としたものが敗れ死す。天の是とするものが勝ち残るのだ。戦いで死んだ者を蘇らせ、捕らえた捕虜を送り返す法^{すべ}があろうか。天の任命した大国の王はすべての国に等しく主であらう。我一人だけの主であらうはずがない。さきにフルン諸国はひとつになって我を攻めたが、天はこのように挙兵したフルンを咎めて我を是とした。大明皇帝は天に抗うがごとく、エホに味方し、非なるを是、是なるを非と断ずるのは何故か。これが第七の恨み⁽²⁹⁾。

ヌルハチは兵たちも厳しく律した。対明出兵にさいして彼は臣下にむかって次のように布告している。

我は喜んで挙兵するのではない。おもなる原因は七大恨にある。その他の小さな恨みはいまさらいうまでもない。凌辱がはなはだしいのでここに挙兵するのである。我が軍は進軍するすべてのところで、厳しく規律を守れ。捕虜の衣服を剥ぐな。女を犯すな。夫婦を分けるな。抵抗して死ぬものはかまわぬが、帰順する者は軽々しく殺戮するな⁽³⁰⁾。

このほかに、ヌルハチは家臣が酒に酔って城塞の守護をおろそかにしたことから、「戒酒令」をだ

したこともあった。彼は「いにしえの聖賢はこういった：忠言は耳に逆えども行いに利あり、良薬は口に苦けれども病に利ありと。思うに耳を喜ばす言葉は何の役にもたらず、口を喜ばす酒はその身にとって有害だ。戒めるべき」⁽³¹⁾ といって飲酒を禁じたという。彼はこのように武人としての道に厳しいばかりでなく、人としての倫理道徳にも厳格で、「酒を飲まず、タバコもやらず、衣服や道具については、非常に大事にして、むやみに壊したりさせなかった。太祖は女の不貞をもっとも憎み、不貞を働いたものは必ず処罰した」⁽³²⁾ という。

ヌルハチは武人がおろそかにしがちな文治も重視した。軍制としての八旗制度同様忘れてはならないのが、満州文字の制定である。満州では当時すでに女真文字は廃れ、文書はモンゴル文字を借用しており、不便であった。しかし、文字の制定は大変であるから、多少の不便は我慢していままでどおりモンゴル文字を使ったほうがよいという意見に、ヌルハチは次のようにいう。

漢人が漢文を読めば、およそ漢字を習ったものも、習わないものも、等しく意味を理解する。モンゴル人がモンゴル文字を読めば、モンゴル文字を習わないものもすべて意味を理解する。しかし、我が国の言葉は必ずモンゴル語に訳して読まなければならないのでモンゴル語を知らない者は理解できないのだ⁽³³⁾。

ヌルハチは便宜上からばかりでなく、民族の統一の上からも満州固有の文字の必要性を感じていた。このように文武徳行全てを兼ね備えた王者として過不足ないヌルハチの後継者ホンタイジも性格は異にするが、やはり英雄的姿をとってあらわれる。

『実録』『大清太宗文皇帝実録』⁽³⁴⁾ は彼〔ホンタイジ〕のありさまと品行を次のように書いている：天顔は稀に見る偉大さだった。顔は太陽のように赤く、厳寒でも暖を取る必要がない。歩くさまは堂々としており、拳止も常ならぬものがあつた。天は叙知を賜り、恭孝仁恵、誠信寛和、聖人の徳はすべて備っていた。言葉は明敏で、威儀は莊重であつた。耳目にかかるものは、一度聞けば忘れず、一目見れば理解した。武勇にもすぐれ、

歩射しても騎射しても、矢を無駄にはしなかった。遠くまで見通して謀りごとをし、行動は時機を逃さなかった。敵を把握して勝利を得、兵を用いることは神業であつた。典籍を好み、倦きことなくめくっていた。幼い頃から並外れて賢かつたので、太祖は彼を愛してやまなかつた⁽³⁵⁾。

また、次のようにも書いている。

古来英雄で無情の者はない。太宗は威風堂々たる英雄でもあり、辣腕の政治家でもあり、同時にまた多情多感な性格であつた。開国の令主として、千年もの長い間なお生氣をたもっている。型にはまらず、長所も一所に偏らず、全てに知識をもっていた。……〔中略〕……『実録』『大清太宗文皇帝実録』にいう：「^{しょう}上は幼くして聡明、性格は寛大で、慈しみ深く、穏やかで、慾がなく、法令を守り、殺さずして威厳があつた。善く人材を育成した。国の功勞者にはすべて、衣物を賜り、少しも粟菴ではなかつた。新たに朝見に来た各国の使者には必ずその譜系をたずね、旧い知合いに会つたようだった。……〔中略〕……上は太祖の大業を喜び引き継いで以来、統治にはげみ、悦楽に耽けらず、國家の仕事総攬し、倦み疲れることがなかつた。早起きし、夜は遅く寝て、政務に励んだ」これは皆記実で、決して誇張ではない。太宗を太祖と比較すれば、太祖は秋霜烈日のごとく、凜として犯し難い。太宗は冬日の春風のごとく、人に愛され親しまれた。為政は厳格を好まず、境界を分けなかつた。これはひとえに寛仁を以て待つたからである。のちの大清帝國は満漢蒙等各民族を融合して平和と幸福をともに享受し、昔日の境界を打ち破り今日に至っているけれども、この恩恵は皆太宗の基礎のお陰である⁽³⁶⁾。

ホンタイジはヌルハチと性格もその時代も異なっていたが、基本的にはヌルハチの方針を継いでいた。彼の偉大さは戦場よりむしろ対明、朝鮮、モンゴルとの外交交渉や異民族政策にあらわれている。彼は和議による周辺諸国との關係安定につとめたが、相手方の非友好的な態度のため、決裂することもあつた。そんなとき、ホンタイジは毅然たる王者の風格でこれに対処した。

満洲皇帝は明国皇帝に奏上する。我が国が兵を挙げたのはその得るところに満足できず、大位を得ようとしたからではない。辺境の官吏が凌ぎ憤らせるので、上に訴えたが通じないので、戦いはじめて、ここに幾歳月となった。おもうに、常に戦いをすれば、いづれの国も皆苦しむし、講和をすればいづれの国も皆幸福となる。それゆえ、さきにチャハル征伐を行なった際、宣布の地で講和を議して、白馬黒牛を犠にささげ、天地に誓ったのである。我は心中すでに講和が成ったと思い、永く互いの和平を保つため、我が国の越境者を捕まえて、汝の国境官吏の前でこれを殺し、掠奪した財物を悉く還した。ここ数か月、汝らの辺境を少しも侵してはいない。彼らはこのように篤く誓いを守っているのだ。古えを覩れば、下意が上達すれば天下太平とならないことはなく、下意が阻まれて上達しなければ天下が乱れないことがない。我ら両国が戦いを始めた理由もまた下意が阻まれて上達しないからであるぞ⁽³⁷⁾。

「天朝」と自称する明のいわれなき蔑見ゆえに幾度も不条理な扱いを受けながらも、ホンタイジは明人を恨んでいたずらに復讐に走ることはせず、かえって捕虜や投降者は格別の待遇で受入れた。

然るに太宗は一人ひとり有用であるとし、およそすべての投降者、捕虜はほとんどのちに漢軍八旗となり、代々名門となったものも十指にあまりある。すなわち軍籍のものも国によってきわめて優遇され、満洲八旗と何ら差別はなかった⁽³⁸⁾。

モンゴルや朝鮮も当時は後金国より歴史があり、無視できない存在だった。これら諸国ともスムーズに和議が結ばず、ホンタイジは苦慮させられた。しかし、一旦女真の勢力下に服せば、彼はおのれの軍隊を厳しく統率し、掠奪者となることを戒め、各国の民びとや文化を保護した。

[太宗は] 軍令を頒布していう：「およそ我が軍が進軍するところで、抵抗したり逃げたりするものがあれば、これを殺せ。抵抗しないものは捕虜とし殺してはならない。抵抗しないものを殺したり、その衣服を掠奪したりすれば、これを罰し、

掠奪したものは告発者に与える。廟に逃げ込み潜む者があれば、行って捕らえよ、そして僧侶の数を報告せよ。廟内に住んではいけない。違反者は罰する。寺廟を壊したり、その什器財産を盗ったり、人家に侵入し婦女を姦淫するものは、死罪とする。」……[中略]……太宗時代はモンゴル人を優遇したばかりか、ラマ教を尊崇し、行軍毎に幾度も命令を出し、とりわけこれらの寺院建築を保護した⁽³⁹⁾。

ホンタイジはまた、文化政策にも熱心であった。ヌルハチは満洲文字を制定し文治の先鞭をつけたが、戦いに明け暮れる日々では、それを有効に発展させる暇がなかった。ホンタイジはヌルハチの偉業を継いで、安定した国土を維持するために文治にはとりわけ力を尽くした。彼はさまざまな典籍を収拾し、それらを満洲語訳させ、さらに文館制度しいて、人材の育成にもつとめた。ホンタイジは一六二九年九月、次のような詔をだしている。

古えより我が国は文武を併用してきた。武功で以て乱を治め、文教で以て太平を助けていた。朕は今文教を振興しようとする。汝学者たちの中で、文芸によく通曉しているという者は試験をして、とくに優れたものは奨励して人材を養成するきまりとしよう。諸ペイレや満、漢、蒙古の諸家で儒者があれば、試験をして、受かったものは別に褒美をとらせよう⁽⁴⁰⁾。

以上、例によって述べたごとく、ヌルハチ、ホンタイジはけっして武勇のみに長じている騎馬民族的英雄として描かれてはいない。文武徳行すべてにすぐれたはなはだ漢族的イメージの英雄となっている点に注目したい。穆儒丐は『福昭創業記』によって異民族の征服者としてヌルハチ、ホンタイジがもっている負のイメージ——好戦的で、野蛮、非文化的——を払拭しようとしていたかのようだ。このような穆儒丐の意図は、『福昭創業記』の随所にみられる明の「夏夷の見」にたいする反撥のかたちであらわれている。その例をいくつかみてみよう。

およそ天朝として自居しているものは、根本から外交というものにかまわないのだ。天にただひ

とつ天朝があるだけなのだから、その他はすべて四夷であり、あるいは野蛮な部落である。天朝にやってくる四夷の人はすべて、その内容にかかわらず、天朝に朝献するしかなかった。いま朝献ではなく、突然平等な考えで交渉に来ることがどうして許されようか。それゆえわれわれがひろく歴史をみると、天朝には外交がないので、敵兵が城下に至り、敵将が濠に至って、天朝の城を打ち倒してその王朝は終わりになった。もし平時に国外情勢を研究させ、国際利害をあきらかにさせ、互いに往来させたらと考えても、それは至難であった。明末の天下はまさにこのようであった。明以外に敵対する国が存在すると考えず、外交手段で国運を維持しようなどとはさらに考えなかった。唯一の思想は、彼らは天朝で、他は夷狄だということで、もし夷狄と和睦を語れば、それは面目丸つぶれな事であった⁽⁴¹⁾。

平等な外交を拒むいわゆる「夏夷の見」は無用な戦いを避けようとするヌルハチ、ホンタイジの思いに反して和議を難しくした。

満洲と明の和議は当時ある人が論じたことがあるが、明に利があり、満洲には不利であった。如何せん明の君臣はおのれは天朝で、四海以外に国家なしという考えしかなかった。たとえ大小の部落はあっても国にはあたらず、どうせ夷狄の集りで、天朝を侵すものである。およそ天朝を侵すものは罪がもっとも重いものだから、徹底的にやっつけて、永遠に夷狄として、イヌのようにみなして当然だったのである。ただ残念なことに彼らの思惑どおりにはいかず、夷狄は日増しに強くなり、天朝は弱体化した。そうなのだから、虚言を減らして、真面目に話し合うべきだったのだ。しかしそうはできず、夷狄と講和することはいかなる恥辱と思いつけた。このような尊大傲慢な考えがなくなれば、和議がどうして成立しようか?⁽⁴²⁾

女真が強大化する以前に明がとってきた対女真政策も、「夏夷の見」によるはなはだ屈辱的なものだった。

〔明は〕満蒙各民族に対して実力ある真の統治

をしなかった。ただわずかに手段を講じて諸族を繋ぎ止めたにすぎない。勅書の制度はこのとき始まったのである。……〔中略〕……我々は満洲が決して文化の果つる野蛮な地方ではないことを知るべきである。遙か殷商のむかしより、肅慎氏が中原と交通したことが書経の「肅慎の命」⁽⁴³⁾にみえる。中世以後、高句麗、渤海、遼、金が国を建てた。固有の文化をもっていたばかりか、その部族の長は明初ごろ分裂し統一していなかったが、国家思想を追求し、民族意識が依然として存在していた。それゆえ明は軽視もできず、ある種の懐柔策でその勢力を分散させ、その文化を墮落させ、ここを野蛮で不文の地に変えて再起不能をはかった。そこで役所も置かず、兵も置かず、境界線を引き、ここを二百四十あまりの衛に分けた。衛官はみな満洲人で、都督、千戸、百戸〔いずれも官名〕があり、明朝より勅書、衛印を賜った。満洲人は、虚栄を得、明人は実利を得た。朝貢するよう仕向けて、衣服、靴、靴下などの褒美を与え、引切りなしに彼らに虚栄を争わせ、互いに殺しあいさせた。文化と民族の調和の大計にいたってはまったく取上げず、満洲人をひたすら日々退化に向かわせた。そのもくろみは悪辣の極みである⁽⁴⁴⁾。

このような明朝の対満洲蔑視は、明を「天朝」と崇め奉る朝鮮にも影響を与えていた。

朝鮮人もいわば東夷のひとつなのだが、最も早く漢化した。それで、夷から夏に変身し、第二の礼儀の国として自居しており、〔明〕同様に文化の低い民族を夷狄胡虜と呼んだ。……⁽⁴⁵⁾

彼ら〔朝鮮王朝〕の〔太宗の尊号を認めない〕理由は天に二日なく、民に二王なしと言うことだった。今は明国皇帝のみが万国共通の王なのだから、朝鮮国の君臣はあたかも孝子のごとく明朝を奉っていた。ここに明の天子以外にもう一人皇帝が出現したのだから、彼らにとっては不合理なことで、絶対に反対しなければならなかったのだ。この考えは筋がとおっているようだが、彼らはただ時勢を理解せず、事実を軽視し、皇帝の誕生が完全に実力によるもので、実力とは天心と民意の結合に等しいことを知らなかったにすぎな

い⁽⁴⁶⁾。

『福昭創業記』は「夷狄」のヌルハチ、ホンタイジと「天朝」の明、その「孝子」朝鮮を対比して描くことによって、前者の偉大さ、非凡さをいやがうえにも浮き彫りにしようとの作者の意図がうかがえる。穆儒丐は何故このような英雄を描こうとしたのであろうか。

英雄の創生

英雄としてのヌルハチ、ホンタイジ像は実体なき「天朝」明及びその垂流と対比してみると、文学的成果としては欠陥をもっている。それはまず彼らがあまりに完全無欠であるがゆえに、不自然で人間味に乏しいという点である。さらに、ヌルハチ、ホンタイジが満洲族の英雄であるにも拘らず、その英雄像があまりに漢族的である点である。『福昭創業記』吉林文史版の「前言」で、玉漫は『福昭創業記』に散見する偏向を次のように批判している。

ヌルハチとホンタイジの大業は幾千万の屍の上にうちたてられたものだといってもすこしも誇張ではない。彼らはその屍を踏みしだきつつ、一步一步全中国の最高権力の玉座へと進んだのである。しかし、『福昭創業記』はなさねばならない暴露や分析をおこなわず、この点で、歴史的事実にそむいている。われわれが言いたいのは、歴史とは民衆の総体がなせる業であって、決して一、二の英雄豪傑ですべてを包括できるものではない。作者は清の太祖太宗の歴史的役割の側面ばかりを誇張しているが、これは作者のもつ英雄が歴史を造るという誤った観点のあらわれである⁽⁴⁷⁾。

民衆の歴史に於ける役割を重視する歴史観からすれば、穆儒丐の英雄重視は確かに批判されなければならない。だが、非凡なる英雄ヌルハチ、ホンタイジ像は穆儒丐のはなはだしい誇張と虚構の産物ではない。英雄の創生の原因は、ひとつには彼がよってたつところの文献にある。清朝入関前の文献は清朝、明、朝鮮各国のものがあるが、ひとつの事件、ひとりの人物にたいしてもそれぞれの利害から解釈は同じでない。清朝サイドのものは、当然その王朝の正当性を説かんがために、ま

た、蛮族としての誇りを免れるために、漢族的道徳基準に照して、必要な粉飾を加えているところがある⁽⁴⁸⁾。また、のちの研究では、ヌルハチらの旗揚げが必ずしもいわゆる「大義」のためとはいいきれないという。たとえば、「七大恨」であるが、必ずしもヌルハチの掲げた「恨」がすべて妥当なものとはいいきれない。また、ヌルハチは私的野心ではなく「義」のためにのみ挙兵するというのは、当時の女真を取り巻く軍事、政治、社会、経済などさまざまな側面との関連を無視した美化である⁽⁴⁹⁾。だが、穆儒丐は執筆にあたり、各種の歴史文献の比較検討を怠ったわけではない。むしろ多くの文献を渉猟し、彼自身の執筆目的にあった記載を選び採用してヌルハチ、ホンタイジ像を造りあげた。つまり、穆儒丐にとっては近代的リアリズムの要請に応ずるような人間化した、ときにはその結果として卑小化したヌルハチ、ホンタイジは必要なく、超人的英雄が必要だったのである。彼は『福昭創業記』に映画のナレーションのように「画外音」として作者自身の意見や解説を挟んでいるが、英雄についてこのように書いている。

中国四千年来の悪癖がある。すなわち、死人を褒めあげ生きている人を褒めないこと、失敗した人を褒め成功した人を褒めないことである。たとえロクデナシでも、途中で殺されたら、多くの人が彼を褒めあげてやるのだ。死なずにもし生きながらえても如何ほどの大功をなすかもわからないのだが、繰り返し詠歎し、哀しみに堪えないかのようである。しかし、一般に真の成功した大英雄、大豪傑、或いは偉大な帝王には、冷淡であったり、皮肉や誇りに全力を注ぐ。これは他でもない、英雄を崇拜する気持ちも習性も根本的にないからなのだ。ただ失敗し殺された何人かを選んで、彼らにかかわって恨みつらみをいったり、無責任な言を吐いてそれでよしとしているに過ぎない。このどこに真の是非があろうか?⁽⁵⁰⁾

穆儒丐は中国に伝統的にみられる「判官蟲」的歴史人物評価に対して異をとらえているようだが、彼を苛立たせたのはじつは当時普遍的であった清朝を必要以上に貶め侮る風潮にほかならない。

一般の清代史に詳しくない人は侮辱をもくろむ悪辣な宣伝に惑わされて、清朝歴代皇帝は専制の二文字以外、まるで民衆とは何の関係もなかったようにいうが、これは出鱈目である。とくに創業者太祖、太宗についてはもっと認識不足で、ただか好戦的な武人に過ぎないとしている。あにはからんや、単純な武人がどうして王業を成し遂げられようか？⁽⁵¹⁾

穆儒丐は「天朝」と自称した明や朝鮮が満洲の新興国に対してもっていた偏見が、三百年後の現在清朝が打倒されるや勢いをとり戻し、人々の歴史をみる目を曇らせていることに満洲旗人の末裔として憤りを感じざるを得なかった。「夏」、「夷」という「名」が実体を裏切っているという彼の確信が、清朝三百年の統治も含む満洲にたいする偏見を許すことができなかった。先に穆儒丐は客観主義、文献主義の態度で本書を書いたと述べた。しかし彼は単に満洲史を忠実に再現したいという願望で本書を書いたのではなかった。穆儒丐は己れのなかに満たされることのないナショナリズムをもっていたのである。穆儒丐は自己のナショナリズムのために、歴史に必要以上に権威を認めるもうひとつの中国人の伝統的心理を巧みに衝いて「史実」を利用したといえるだろう。そして「史実」を現実と等号で結ぶ心理の上に、穆儒丐の怒りと真実と理想を映しだしたのである。

第三章 『福昭創業記』と満洲国

歴史小説が単なる過去の再現に終わらないならば、必ず現代に対するアレゴリーを含んでいる。『福昭創業記』は「満洲国」建国五年目に書かれている。「建国」というテーマがこの歴史的事件と何の関わりも無いと考えるのはむしろ不自然であろう。ここで「満洲国」建国と『福昭創業記』の成立について考えてみよう。

穆儒丐は青少年期に様々な歴史的事件を通過して、強烈な民族意識をもっていたし、辛亥革命後の北京を経験して、中華民国に対して反感をもっていた。だから、彼にとって満洲の独立はひとつの希望であったかもしれない。しかし、現実の「満洲国」建国は彼の理想と大いに異なっていたであろう。関東軍が深く介在しており、これによって

「満洲国」は不自然で畸形的な国として運命づけられていたからである。穆儒丐、延いては当時の一般人が「満洲国」の傀儡性をどの程度正確に把握していたかはわからない。しかし、「満洲国」の畸形性は建国の過程におけるさまざまな側面から表出してきた。文学の面でいうと「満洲国の文学に如何に建設するか」という議論をとおして顕在化した。

ある国がその建国や政治体制の大きな改革に刺激され、国民文学創立を提唱するのは珍しいことではなく、アメリカ合衆国建国期や我が国の明治維新期にみられる。「満洲国」建国期にもこのような動きがみられた。これはまず、一九三五年瀋陽の『民声晩報』文芸副刊『文学七日刊』⁽⁵²⁾上で始った。第一次史料が入手不能なので、当事者であった黄玄⁽⁵³⁾の文によってその様子を垣間みてみよう。

当時、出版界の発展により、文学は繁栄の方向に向かっており、東北文壇建設についての問題がすでに議論の中心課題となっていた。『文学七日刊』第七期の孟素⁽⁵⁴⁾「建設文壇及其他」は大きな議論を引き起こした。……〔中略〕……この討論に参加したのは孟素のほか、石軍、見非、島魂、渡沙、老命、楊園などである。……〔中略〕……当時、『満洲報』文芸副刊『晩潮』でも文壇建設問題をめぐって激しい議論が戦わされており、一年の長きにわたって続いた⁽⁵⁵⁾。

黄玄によれば、これらの議論は「相互練磨」の作用はあったが、個人攻撃なども起り結論を得るにいたらなかった。穆儒丐が編集に参加していた瀋陽の大手新聞『盛京時報』もこの問題に関心ではなかった。当時同紙は創刊三十周年を迎えようとしていたので、記念懸賞論文を募った⁽⁵⁶⁾。そのうちのひとつの論題は「如何にして『満洲国』の文芸を振興し、その独立的色彩を有ら使むるか」であった⁽⁵⁷⁾。建国当初の混乱を経て、次には具体的に如何にして国を建設していくかという問題が起ってきていた。国民精神の表現としての使命を負った文学は、「満洲国」独自の国民性にもとづく文学的独創性の発揮を求められたのである。

しかし、このとき「満洲国」の畸形性がネックとなった。「満洲国」の成立はあまりに人工的であ

り過ぎた。「王道楽土」や「五族協和」のスローガンは、国民それぞれがよってたつところの民族、文化、歴史とは何の必然的連鎖もなく、空虚な観念として存在するのみだった。「満洲国」はその成立過程からして国民性を持ち得ない畸形的国家だったのだ。

満洲文学の建設の議論の結末は一九四三年新京で行なわれた小林秀雄を囲む座談会記録に象徴的にあらわれている。

小林：そこで昨日古丁君にもいったのだがさういうところで満洲の満人の作家は何か非常にオリジナルな作品を工夫する余地があるのではないかね。

…… [中略] ……

爵青⁽⁵⁸⁾：なる程、この天から与へられた環境といふか、時代が与へてくれた環境といふか、かういふ環境の中に生きておつて、本当に人間のことを考へてゆけば、何かかう出て来る、政治家が、或は実業家が考へなかつたことが、何か僕等の頭から出て来るのです。——結論的にいつてどんなものかよくわかりませんがね——⁽⁵⁹⁾。

「満洲国」の作家たちが求めても求められない「満洲国」独自の国民性を持った文学を探索して苦悩し続けたさまが痛々しく伝わってくる。「満洲国」の作家たちはこのような悲劇的運命を背負っていたのである。

穆儒丐もまたこのような時代にこのような環境に生きていた。『福昭創業記』を執筆した当時、彼はまだ「満洲国」に絶望はしていなかった。彼は彼なりに「満洲国独自の色彩」とはなにかを探索していた。建国というこの時期に、彼は古えの建国の歴史を掘り起こすことで満洲の国民性の根本を追求した。満洲の源流については、折りしも「満洲国」独立の是非の理論的根拠として、学界でも盛んに論じられていた⁽⁶⁰⁾。穆儒丐はヌルハチ、ホンタイジの創業を探索することで「満洲国」の本来の姿を発見しようとした。

いま太祖が統治する「満洲国」は、あたかも最も理想的なユートピアのようであった。まず第一に、彼らは一致した信仰、天と堂子⁽⁶¹⁾があり、彼らを誠心誠意団結させる教会になっていた。どん

なことでも、まず天と堂子に告げた。このことは軽視すべからざることである。第二に、当時彼らはすでに相当な文化を持っていた。産業面で大きな進歩があったばかりでなく、文字が使用され公私の事務上少なからず便利になっていた。……[中略]……太祖時代の国はまさしくひとつのユートピアを実現していたといつてよい。牛馬を山に放つても、見張りは必要なく、ものが道に忘れられてもとって自分のものにする人は誰もいなかった。法律はかくも公平で政治はかくもシンプルで、積年の不条理はひとつとしてなかった⁽⁶²⁾。

穆儒丐の描くユートピアは争い、陰謀、強制とは無縁の、すぐれた指導者に導かれた信頼と誠意と平和に満ちた世界である。このような見事に調和のとれた世界こそ、満洲の英雄の各民族を分け隔てなく受容する民族融和の精神の賜物である。穆儒丐は民族の離合分散のさまを河の流れにたとえて、「[太祖・太宗の]大業が成功したのは、百流[各民族]を受容した必然の結果である」⁽⁶³⁾ともいっている。穆儒丐はヌルハチ、ホンタイジの時代を見直すことで、民族融和という満洲の成立と発展の根本精神を発見したといえよう。この精神を理解してほしいと彼が望んだのは「正史を読む暇も能力もない」人々ばかりではあるまい。むしろ、周囲の至るところにみいだされた現代的「夏夷の見」、つまりエゴイスティックな思惑のために、満洲を変質させようとする人々に、満洲の本質を理解させ、その向かうべきゴールをさし示したのである。

結 語

「満洲国」時代、この国に生きていた文化人たちは、特殊な状況下にあった。彼らが、「満洲国」のために彼らの立場で努力したとしても、一概にそれが漢奸的行為であるとして退けることはできない。「満洲国」に生き、そして死ぬことを運命づけられた者は皆、彼らが生活していかなければならないこの国を、自らの理想のように建設したいとそれぞれに夢見て、自己激励したにちがいない。穆儒丐もそんなひとりであった。彼は満洲旗人の末裔の満洲国民という二重の特殊性をもって生きていた。『福昭創業記』はそのような穆儒丐の民族

の、また国家の理想の表現であったといえるだろう。
(1991年11月21日受理)

注

- (1) 本名穆都哩、のち改名して穆篤里。六田、辰公ともいう。1884年、北京西郊の満洲正藍旗人の家に生まれる。1905年、早稲田大学留学、師範科歴史地理科および政治財政科で学ぶ。1911年春帰国し、清朝官吏になろうとするが、辛亥革命により進路を変えざるを得ず、北京『大華日報』紙の記者となる。1917年、瀋陽の盛京時報社に入社、以後ここを拠点に活躍し、評論、創作、翻訳など多くの文章を発表した。代表作として『伶史』『梅蘭芳』『北京』『徐生自伝』『以上小説』『モンテクリスト伯』『レミゼラブル』『以上翻訳』など。
- (2) 『盛京時報』は1906年、日本人中島貞雄によって、瀋陽で創刊された。1944年9月紙不足のため、統合されて『康徳新聞』となるが、実質的には1945年8月16日まで続いた。『神皋雜俎』は穆儒丐によって1918年に創設された文芸・娯楽のページ。
- (3) 1938年、日満文化協会発行。
- (4) たとえば、吉林文史版『福昭創業記』の玉漫の前言に次のようにある：作者は清代のすべての側面を賞揚し、これと現実〔の中国〕を比べて、一方では今を否定して古えを褒めたたえ、一方では満洲国にまで言葉を広げて、満日協和を提唱している。
- (5) 『東方学報』61冊、1989年3月、京都大学人文科学研究所発行。
- (6) 1939年2月11日付『盛京時報』。
- (7) 1635年成立の『太祖実戦図』をもとに改題、書き直されたものらしい。編者不明。内容はヌルハチの実録。
- (8) 1939年2月11日付『盛京時報』。
- (9) 『清太祖武皇帝実録』は成立年不明だが、ヌルハチの実録で内容はほとんど『満洲実録』に同じ。『満文老档』は原典は不明だが、1775年の整理重抄本が残っている。内容は1607—1636年にわたる太祖太宗の実録。『満洲実録』の底稿といわれ、『実録』に欠く残酷な描写も含む。『満文老档秘録』は金梁ら訳、民国の出版。『東華録』は王先謙著による清朝の編年史で1884年頃より刊行。
- (10) 吉林文史版『福昭創業記』前言、P.3。
- (11) 1915年1月。
- (12) 1938年8月12日付『盛京時報』。
- (13) 1937年7月20日付『盛京時報』。
- (14) 『清史稿』『開国方略』とともに清朝史書。
- (15) 1939年2月11日付『盛京時報』。
- (16) 大岡昇平「歴史其儘と歴史離れ」(『文学界』1967年7月号原載、『歴史小説論』[岩波書店同時代ライブラリー、1990年11月15日]所収)。
- (17) 三田村泰助『清朝前史の研究』によると、この開国説話はヌルハチが後金国を建てた頃、高句麗に伝わる夫余国伝説をもとに創られたらしい。ブクリョンションは実在しない。
- (18) 女真を統治下に置くために、さまざまな官職を授けた文書。明は朝貢させ、その献上品に応じて授け、これがあると馬市などへの道中で優遇を受けた。
- (19) 城攻めに用いた長さ八丈、幅五尺の大梯子。
- (20) ダイシャン、マングルタイは兄、アミンはヌルハチの弟シュルガチの子。
- (21) 1629年設置、漢籍の翻訳など司どる。のち、内三院となる。
- (22) 吉林文史版『福昭創業記』一七回、P.237。
- (23) 王侯貴族の位。
- (24) 秦が滅亡した時秦王子嬰児が劉邦に奉ったといわれる璽で、皇帝権の象徴。後漢の時不明となり、この時のものは真璽ではない。
- (25) 京城の南西(京畿道広州郡中垵面松枝里麻田)にある地名。要塞があった。
- (26) ダイシャンの子(ホンタイジの甥)。
- (27) 吉林文史版『福昭創業記』首回、P.4。
- (28) 吉林文史版『福昭創業記』四回、P.52。
- (29) 吉林文史版『福昭創業記』五回、P.71。
- (30) 吉林文史版『福昭創業記』五回、P.72。
- (31) 吉林文史版『福昭創業記』一二回、P.157。
- (32) 吉林文史版『福昭創業記』一三回、P.168。
- (33) 吉林文史版『福昭創業記』三回、P.31—32。
- (34) ホンタイジの実録。原本の成立年は不明だが、乾隆年間[1739年]の重修本が残っている。
- (35) 吉林文史版『福昭創業記』一三回、P.171。
- (36) 吉林文史版『福昭創業記』三二回、P.605。
- (37) 吉林文史版『福昭創業記』二三回、P.347。
- (38) 吉林文史版『福昭創業記』二二回、P.334。
- (39) 吉林文史版『福昭創業記』二二回、P.329—330。
- (40) 吉林文史版『福昭創業記』一七回、P.237。
- (41) 吉林文史版『福昭創業記』一四回、P.181。
- (42) 吉林文史版『福昭創業記』一五回、P.198。
- (43) 『史記』巻四。
- (44) 吉林文史版『福昭創業記』二八回、P.508。
- (45) 吉林文史版『福昭創業記』二五回、P.439。
- (46) 吉林文史版『福昭創業記』二六回、P.456。
- (47) 吉林文史版『福昭創業記』前言、P.7。
- (48) 『満洲実録』はヌルハチの残忍さを描いた部分を『満文老档』から削っている。たとえば、女真の部落インナイン部を攻め取った際、その兵を皆殺

しにした部分は削られている。また1616年、ヌルハチが「帝」の尊号を得たと書いてあるが、「汗^{ハン}」の号である。

- (49) 周遠廉『清朝興起史』[吉林文史出版社、1986年7月]によると、いわゆる「七大恨」のうち妥当なのは第三の恨みのみで、明対女真の戦いはこれらの恨みよりも、明政府が女真を侮っていたことと、女真の統一を阻んだことが直接の原因であるという。また天命10年[1625年]10月、漢族居住民を大虐殺する事件があったが、この理由は虐殺によって国内の安定をはかり、朝鮮を攻めるためだった。諸国を攻める時も、まず、逆らえば皆殺しだと嚇して、降伏を迫ったという。
- (50) 吉林文史版『福昭創業記』一四回、P.194。
- (51) 吉林文史版『福昭創業記』一七回、P.235。
- (52) 『文学七日刊』は1935年創刊で、夢園[趙孟原]主編。『民声晩報』は1937年停刊。
- (53) 作家、評論家。本名、王之平。ペンネーム、王秋蛩。1914年遼寧省撫順市生まれ。1933年『民声晩報』入社、のち、『大同報』『盛京時報』の編集を担当。陳因らと文選刊行会を組織し、1938年大型文芸誌『文選』を発行した。代表作に短編小説集『去故集』『小工車』、長編小説『河流的底層』がある。黄玄は近年使用のペンネームで、この名で「満洲国」時代の文学史を書いている。1991年現在、遼寧省鞍山に健在。
- (54) 王孟素は1913年遼寧省新民県に生まれた評論家。顧盈というペンネームも用いる。はじめ鉄道に勤務し、1934年頃から『文学七日刊』に評論を発表し始め、満洲文学建設をめぐる論争では中心的論客となった。孟素自身は如何なる組織にも属さな

かった。満洲国壊滅後は文学活動を止め、鉄道勤務に戻った。

- (55) 「東北淪陥期文学概況(一)」[『東北現代文学史料』第四輯、1982年3月]
- (56) 他の論題は、「論日満融合之具体策」「二十年後之三大都市(新京、奉天、哈爾濱)」であった。賞金は1等50円、2等30円、3等10円。
- (57) 「満洲文芸を……」で一位を獲得したのは、摩西[経歴不詳]。
- (58) 本名劉佩。1913年1月26日遼寧省鉄嶺に生まれる。夷馳、劉遅のペンネームも用いる。満洲雑誌社編集局に勤務。代表作は『花月集』『風雪集』[以上短編集]、『同心結』[長編小説]。
- (59) 「小林秀雄を囲む」[『芸文』2巻8期掲載、1943年8月1日]。座談会参加者は次のとおり；山田清三郎、北村謙二郎、長谷川濬、富田壽、古丁、爵青、宮川靖、小原克己[芸文社社員]。
- (60) 矢野仁『満洲国歴史』[目黒出版社、1933年]は満洲の地は「歴史上から考へて、必ずしも支那の領土といふことはできない」と主唱し、論議を呼んだ。『満洲実録』は1936年、日満文化協会より影印本が出版され、38年には今西春秋による満日対訳本がでた。
- (61) シャーマニズムによる特殊な祭天儀礼をおこなう特別の建物。実際は清朝宮廷に於ける私祭をおこない、その祭祇は清朝祖宗と愛新覚羅一族のもの。
- (62) 吉林文史版『福昭創業記』五回、P.61。
- (63) 東方国民文庫版『福昭創業記』自序[1938年10月12日執筆]、P.2。